

原 著

歯科衛生士学生の障害者に対するイメージ変化
—臨床実習前後におけるアンケートの比較—

安 田 順 一¹⁾ 齋 藤 那美子²⁾ 中 嶋 恵美子²⁾
川 口 千 治²⁾ 橋 本 岳 英¹⁾ 玄 景 華¹⁾

A study on Awareness of Dental Hygienist Students Concerning Disabilities:
Comparison of Before and After Questionnaire Survey of Clinical Practice

YASUDA JUN-ICHI¹⁾, SAITO NAMIKO²⁾, NAKASHIMA EMIKO²⁾,
KAWAGUCHI CHIHARU²⁾, HASHIMOTO TAKEHIDE¹⁾, GEN KEIKA¹⁾

歯科衛生士学生44人に対して、障害者歯科に関するアンケートを、臨床実習開始前と臨床実習終了後に実施し、学生の障害者に対するイメージの変化について検討した。

1) 臨床実習開始前アンケートでは、障害者に対して「コミュニケーションがとりにくい」、「近づきにくい」などのマイナスイメージを持つ者が多かった。臨床実習終了後は、マイナスイメージを持つ者が減少し、「素直で明るい」、「純粋」、などプラスイメージを持つ者が増加した。障害者への苦手意識が克服できた者も多かった。

2) 障害者歯科臨床実習に対する不安の多くは「障害者への関わり方がわからない」ことであった。特にコミュニケーションに不安を感じる者が多かった。

3) 臨床実習までに身につけたい知識や技術は、「診療補助の方法」や「TBI」など、臨床実習の場で学生自身が直接対面実習を行う項目が多かった。「摂食・嚥下障害」、「ノーマライゼーション」は、学生の理解を得られていた。

4) 臨床実習開始前に障害者と関わった経験者は7割と多いが、限定的で頻度も少なかったと思われる。

5) 臨床実習終了後は、障害児に積極的に関わろうとする学生が増加した。特に老人ホームでの口腔保健管理に興味を持つ学生が増加した。

6) 臨床実習終了後は、摂食嚥下機能訓練、筋機能訓練、重度心身障害者への対応に興味を持った者が多かった。

7) 理解している障害名のは数は、臨床実習開始前の平均6.9から臨床実習終了後の平均9.1に増加した。

以上のことから、臨床実習を行うことで障害者への理解が深まるとともに、歯科衛生士の役割を認識させるのに役立っていた。

キーワード：障害者歯科、歯科衛生学生、アンケート、臨床実習

This study examined the effectiveness of the education of dental hygienist students through bedside learning. We conducted questionnaire surveys on dental hygienist students to investigate differences in their impressions of dental care for disabled persons and their interest in working in this field before and after attending special needs dentistry bedside learning.

1) Those with a negative image of people with disabilities decreased. After the completion of the bedside learning, the more students had a positive image of those with disabilities.

本論文の要旨は、第29回日本障害者歯科学会総会（平成24年9月、札幌）において発表した。

¹⁾朝日大学歯学部口腔病態医療学講座障害者歯科学分野

²⁾朝日大学歯学部附属病院歯科衛生部

501-0296 岐阜県瑞穂市穂積1851

¹⁾Department of Dentistry for the Disability and Oral Health, Division

of Oral Pathogenesis and Disease Control
Asahi University School of Dentistry

²⁾Department of Dental Hygiene Asahi University Hospital
Hozumi 1851, Mizuho, Gifu 501-0296, Japan

（平成25年8月16日受理）

2) Many students expressed anxieties about the bedside learning. "I don't know how to relate to people with disabilities" was a common sentiment. In particular, many also felt that communicating with people with disabilities would be difficult.

3) The knowledge and skills students wished to gain prior to the bedside learning was how to provide dental assistance and TBI.

4) The number of students who had previously interacted with disabled people prior to the bedside learning was a high 70%. However, the frequency of contact was considered to be limited.

5) Following the bedside learning, the number of students actively involved with people with disabilities has increased. The number of students with an interest in oral care in nursing homes has increased.

6) After the completion of the bedside learning, many students were interested in swallowing rehabilitation, muscle function training, and treating those with severe mental and physical disabilities.

7) The average number of disability names understood by students increased from 6.9 before the bedside learning to 9.1 after.

The above details demonstrate that the bedside learning served to deepen understanding about people with disabilities, as well helping to gain greater awareness of the role of dental hygienists.

Key words: Special needs dentistry, dental hygiene student, questionnaire, bedside learning

緒 言

歯科衛生士学生の臨床実習では、それまでに学んだ基礎知識を基に、歯科衛生士業務の実践教育の場としてさまざまな経験をするだけでなく、医療人としての自覚を高める必要がある¹⁾。「ノーマライゼーション」や「共生社会」の実現のために、地域医療においても障害者の歯科医療に携わる歯科衛生士が求められている。障害のある人を対象に歯科保健指導や歯科治療を行う歯科衛生士は、障害と障害のある人について理解しておくことが必要である²⁾。

朝日大学歯科衛生士専門学校では、1年次に、ヘルパー2級の資格取得し、2年次前半に障害者歯科の講義を8時間受講している。2年次後半から約1年間の臨床実習を行っている。障害者歯科での臨床実習は約3週間であり、歯科衛生士の役割の理解を深めることを目的とし、障害者に対する「ブラッシング指導」、「機械的歯面清掃」、「フッ化物塗布」など直接対面行為での口腔衛生指導を積極的に行っている。障害者歯科では、知的障害、発達障害、身体障害、精神障害などさまざまな障害者が来院し、全身管理の必要とする者も含まれる。行動調整法を中心に、精神鎮静法下や全身麻酔法下での歯科治療も行っている。重症心身障害者に対する摂食・嚥下障害リハビリテーションや口腔筋機能訓練も行っている。附属病院に入院している医科患者に対する口腔ケアや近隣のデイサービスセンターで口腔ケア実習も行っている。これらを通して障害者歯科での歯科衛生士の役割と重要性を理解させている。

今回、歯科衛生士学生に対して障害者歯科に関するアンケートを臨床実習開始前と臨床実習終了後に実施

し、学生の障害者に対するイメージの変化について調査し、臨床実習がどのように影響したのか検討したので報告する。

対象および方法

朝日大学歯科衛生士専門学校2年生の学生44人を対象にアンケートを実施した。対象者の平均年齢は21.2歳であった。調査時期は、「臨床実習開始前」平成22年10月と、「臨床実習終了後」平成23年7月である。学生には、本調査の目的と方法を説明し同意を得た。臨床実習開始時44人と臨床実習終了後43人から回答を得た。

アンケートは、1) 障害者のイメージとその変化について、2) 障害者歯科臨床実習開始前の不安について、3) 臨床実習開始前までに身につけたい知識や技術について、4) 障害者との関わりについて、5) 障害者と関わる仕事について、6) 臨床実習終了後に障害者歯科に興味をもったこと、7) 知っている障害名について、実施した(表1, 2)。

臨床実習前後の比較検討には、統計ソフトR (Ver 2.10.0) を使用し、マクネマー検定を行なった。

結 果

1) 障害者のイメージの変化(複数回答)(表3上段)

検定の結果、障害者のイメージ変化について有意差を認めたのは「素直で明るい」、「近づきにくい」、「純粹」であった。「コミュニケーションがとりにくい」は、実習開始前より減少したが、有意差はなかった。臨床実習開始前は、障害者に対してプラスイメージである「素直で明るい」、「純粹」は少数であったが、臨床実習終了後は有意に増加した。一方、マイナスイメー

表1 臨床実習開始前アンケート

① 障害者に対するイメージを教えてください。 *複数回答可	ノーマライゼーションを何で知りましたか。
a. コミュニケーションがとりにくい	a. 教科書
b. 素直で明るい人が多い	b. インターネット
c. 近づきにくい	c. テレビ番組
d. 純粋	d. 知人
e. その他	e. 雑誌等
② 障害者歯科で実習をするにあたり、どれくらいの不安がありますか。 *一つ選んでください	f. その他
a. とても不安	⑤ 今までに障害者と関わったことがありますか。
b. 不安	はい、いいえ
c. やや不安	⑥-1 ⑥で「はい」と答えた人に質問です。
d. それほど不安はない	どこで関わりましたか。
②-1 ②の質問で「a」、「b」、「c」に答えた人に質問です。	a. 学校
それはなぜですか。 *一つ選んでください	b. 家族または親戚
a. 障害者歯科での歯科衛生士の業務内容がわからない	c. 知人・友達
b. 障害者に対する知識が少ない	d. イベント
c. 障害者に対する関わり方に不安がある	e. その他
(声掛けや、抑制方法など)	⑦ 将来歯科衛生士になったら、障害者に関わった
d. その他	仕事をしたいと思いますか。
③ 臨床実習までに身につけたい知識や技術がありますか。	a. 思う
*複数回答可	b. 機会があればしたいと思う
a. 障害の種類や特徴	c. 今はあまり思わない
b. 抑制器具の名前や用途	d. したくない
c. 車椅子からユニットチェアへの移乗方法	⑦-1 ⑦で「a」、「b」に答えた人に質問です。
d. 障害者に対する診療補助の方法	どんな場面で関わってみたいですか。
e. 激しく動く患者の抑制方法	a. 障害者専門の歯科で働いてみたい
f. 障害者へのブラッシング指導	b. 老人ホームで口腔保健管理をしてみたい
g. その他	c. 病院の病棟などで口腔ケアをしてみたい
④ 摂食・嚥下障害という障害名を聞いたことはありますか。	d. その他
はい、いいえ	⑧ 現在あなたが知っている障害名はなんですか。
④-1 ④で「はい」と答えた人に質問です。	*複数回答可
摂食・嚥下障害を何で知りましたか。	a. ダウン症
a. 教科書	b. 統合失調症
b. インターネット	c. 自閉症
c. テレビ番組	d. 脳性まひ
d. 知人	e. 認知症
e. 雑誌等	f. てんかん
f. その他	g. 精神発達遅滞
⑤ ノーマライゼーションという言葉聞いた事がありますか。	h. 学習障害(LD)
はい、いいえ	i. アスペルガー症候群
⑤-1 ⑤で「はい」と答えた人に質問です。 *	j. 筋ジストロフィー
	k. パーキンソン病

表2 臨床実習終了後アンケート

① 障害者に対するイメージを教えてください。 *複数回答可	④ 将来歯科衛生士になったら、障害者に関わった仕事をしたいと思いますか。
a. コミュニケーションがとりにくい	a. 思う
b. 素直で明るい人が多い	b. 機会があればしたいと思う
c. 近づきにくい	c. 今はあまり思わない
d. 純粋	d. したくない
e. その他	④-1 ④で「a」、「b」に答えた人に質問です。
② 障害者歯科での臨床実習を通して、障害者へのイメージは変わりましたか。	どんな場面で関わってみたいですか。
はい、いいえ	a. 障害者専門の歯科で働いてみたい
②-1 ②で「はい」と答えた人に質問です。どのように変わりましたか？	b. 老人ホームで口腔保健管理をしてみたい
a. 苦手意識があったが、臨床実習を通して関わりやすくなった	c. 病院の病棟などで口腔ケアをしてみたい
b. 苦手意識が更に増した	d. その他
c. これから深く関わっていききたいと感じた	⑤ 現在あなたが知っている、障害名はなんですか。
d. その他	*複数回答可
③ 障害者歯科での実習を通して、興味を持ったことはどんなことですか。 *複数回答可	a. ダウン症
a. 摂食嚥下機能訓練について	b. 統合失調症
b. MFT 歯科衛生士による筋機能訓練について	c. 自閉症
c. 重度心身障害者への口腔ケア	d. 脳性まひ
d. 重度心身障害者への歯科診療補助	e. 認知症
e. 重度心身障害者への患者対応	f. てんかん
f. 抑制器具・開口器について	g. 精神発達遅滞
g. とくにない	h. 学習障害(LD)
h. その他	i. アスペルガー症候群
	j. 筋ジストロフィー
	k. パーキンソン病

表3 臨床実習開始前と臨床実習終了後の変化

		臨床実習開始前 n=44		臨床実習終了後 n=43		P 値 *p<0.05
		(人)	(%)	(人)	(%)	
障害者へのイメージ (複数回答)	コミュニケーション困難	32	72.7	28	65.1	0.134
	素直・明るい	10	22.7	21	48.8	0.003 *
	近づきにくい	20	45.5	11	25.6	0.008 *
	純粋	14	31.8	20	46.5	0.041 *
関わった仕事をしたいか	したいと思う	1	2.3	2	4.7	1.000
	機会があればしたい	9	20.5	16	37.2	0.023 *
	今はあまり思わない	25	56.8	22	51.2	0.248
	したくない	9	20.5	2	4.7	0.023 *
	(無記入)	-	-	1	2.3	-
聞いたことのある障害名 (複数回答)	ダウン症	43	97.7	42	97.7	1.000
	自閉症	40	90.9	42	97.7	0.480
	脳性麻痺	32	72.7	40	93.0	0.023 *
	認知症	41	93.2	40	93.0	1.000
	てんかん	32	72.7	40	93.0	0.013 *
	パーキンソン病	15	34.1	28	65.1	0.001 *
	精神発達遅滞	32	72.7	38	88.4	0.041 *
	学習障害	18	40.9	36	83.7	<0.001 *
	アスペルガー症候群	11	25.0	33	76.7	<0.001 *
	筋ジストロフィー	15	34.1	31	72.1	<0.001 *
	統合失調症	16	36.4	23	53.5	0.023 *

ジである「近づきにくい」は有意に減少した。

障害者へのイメージについて、「変化がある」が38人(88.4%)、「なかった」が5人(11.6%)であった。変化の内容は、「苦手意識が克服できた」34人(89.5%)、「深く関わっていききたいと感じた」4人(10.5%)であった。

学生の障害者に対するイメージは、臨床実習を通じてプラスイメージが増加しマイナスイメージが減少した。しかし、臨床実習後も「コミュニケーションがと

りにくい」イメージはあまり減少しなかった。

2) 臨床実習開始前の不安とその理由

「とても不安」、「不安」、「やや不安」の合計は42人(95.5%)で、「不安はない」は2人(4.5%)であった(図1)。不安の理由は、「障害者への関わり方がわからない」35人(72.7%)であり、次いで「障害者歯科での歯科衛生士の業務内容がわからない」6人(13.6%)、「障害への知識不足」2人(4.5%)、その他4人(9.1%)であった(図2)。



図1 臨床実習開始前の不安

図中の数値は人数を示す。

■業務内容がわからない □障害者への知識不足
■関わり方がわからない □その他



図2 臨床実習開始前の不安理由

図中の数値は人数を示す。

■障害者歯科で働きたい □老人ホーム ■病棟での口腔ケア □その他

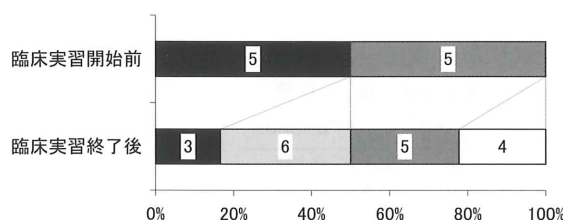


図3 障害者と関わってみたい場面について

図中の数値は人数を示す。

「障害者と関わった仕事をしたい」および「機会があればしたい」と回答したのは、実習開始前10人、実習終了後は18人であった（表3中段）。実習開始前は0人であった「老人ホーム」は、実習終了後に6人に増加した。

学生は、障害者歯科臨床実習に強く不安を抱いていた。不安の多くは「障害者への関わり方がわからない」ことであった。知識として「障害」は理解していても、実際の関わり方に不安を感じている者が多かった。

3) 臨床実習までに身につけたい知識や技術について

「障害の種類や特徴」21人（47.7%）、「抑制器具の名称・用途」15人（34.1%）、「移乗方法」20人（45.5%）、「診療補助の方法」34人（77.3%）、「患者抑制方法」24人（54.5%）、「TBI」37人（84.1%）であった。身につけたい知識や技術は、「診療補助の方法」や「TBI」など、臨床実習の場で学生自身が直接対面実習を行う項目が多かった。

「摂食・嚥下障害を知っている」43人（97.7%）であった。知った機会について、教科書36人、インターネット3人、テレビ8人、知人2人、雑誌など1人であった（複数回答）。「ノーマライゼーションとい

う言葉聞いたことがある」44人（100.0%）であった。聞いた機会について、教科書43人、インターネット1人であった。「摂食・嚥下障害」、「ノーマライゼーション」という言葉は学生に理解を得られていた。

4) 障害者との関わりについて（複数回答）

「今までに障害者と関わったことがある」31人（70.5%）で、「関わったことがない」13人（29.5%）であった。関わった場所は、学校が20人、親類5人、知人友達6人、イベント3人であった。

臨床実習開始前に障害者と関わった経験者は7割と多いが、学校で関わった者が多かった。学生の3割は、障害者に関わったことがなかった。

5) 障害者に関わる仕事について（表3中段）

検定の結果、「機会があれば関わりたい」が有意に増加し、「したくない」が有意に減少した。約半数は「今は思わない」と回答した。

「関わってみたい」、「機会があれば関わりたい」と回答した者を対象に、関わってみたい場面について尋ねた（図3）。臨床実習開始前は、「障害者歯科」5人（50.0%）、「老人ホーム」0人（0.0%）、「病棟での口腔ケア」5人（50.0%）であったが、臨床実習終了後は「障害者歯科」3人（16.7%）、「老人ホーム」6人（33.3%）、「病棟での口腔ケア」5人（27.8%）、その他4人（22.2%）であった。

臨床実習開始前では、障害者に関わろうと考える学生は少なかったが、臨床実習終了後は、「機会があれば関わりたい」学生が増加し、特に老人ホームでの口腔保健管理に興味を持つ学生が増加した。「したくない」は減少したが、約半数の学生は、障害者に関わることは消極的であった。

6) 障害者歯科に興味をもったこと（臨床実習終了後）

摂食嚥下機能訓練について19人、筋機能訓練17人、重度心身障害者への口腔ケア20人、重度心身障害者への歯科診療補助12人、重度心身障害者への患者対応22人、抑制器具・開口器について13人、とくにない2人であった。

7) 理解している障害名の数（表3下段）

理解している障害名のは、臨床実習開始前の平均6.9から臨床実習終了後の平均9.1に増加した。

検定の結果、有意差を認めたのは、脳性麻痺、てんかん、パーキンソン病、精神発達遅滞、学習障害、アスペルガー症候群、筋ジストロフィー、統合失調症であった。これらの障害は臨床実習を通じて理解する学生が大幅に増加していた。一方、有意差を認めなかったダウン症、自閉症、認知症は、実習前後を通じてほとんどの学生が理解していた。

考 察

1) コミュニケーションについて

障害者歯科の困難性の一つとして、一般的なコミュニケーションが困難な患者が多いことが挙げられる。本調査でも、臨床実習前の障害者のイメージで「コミュニケーションがとりにくい」と回答した者が72.7%であった。臨床実習終了後でも65.1%であり、約3人に2人の学生が、コミュニケーション方法に困難を感じていた。他の学校でも、コミュニケーションが困難と感じている学生は多くみられ、歯科衛生士学生での調査³⁾でも80.8%と高率にコミュニケーション困難と回答があり、歯学部学生についての調査⁴⁾でも、コミュニケーション困難と回答した者は、講義前68.2%、講義後53.3%との報告されている。

障害者とのコミュニケーションは、トータルコミュニケーションと呼ばれるように、一つの方法だけでなく可能な方法を組み合わせて行うことが重要である⁵⁾。障害者と関わった経験が少ない場合、初めて直面する障害者に対して、どのようなコミュニケーションをすれば良いのかが分からなかったと思われる。本調査を行なった歯科衛生士学生の平均年齢は21.2歳と若く、幅広い年齢層の人々とのコミュニケーション経験が乏しく、同世代以外との接し方や会話の方法が見つけにくいことが考えられる¹⁾。また、障害に対する知識が不十分であり、言語以外の患者のサインに気付かないなどの観察不足や、実際の臨床実習での緊張感から手技に気を取られやすく、コミュニケーションまで手が回らないことも考えられた。今後、コミュニケーションを充実させるためには、障害にあった具体的なコミュニケーション手段について理解を深めることと、実習前にロールプレイングなどの演習を行うなど、新たな工夫が必要と思われる。

2) イメージの変化

将来、歯科衛生士として「障害者に関わる仕事をしたい」学生は、臨床実習開始前に比べて臨床実習終了後に増加した。逆に、「障害者に関わる仕事をしたくない」学生は大幅に減少した。障害者歯科臨床実習での直接対面行為（ブラッシング指導・機械的歯面清掃・フッ化物塗布）が障害者と学生の距離を縮め、障害者に関わった仕事をしたいと考える学生が増加したと考えられる。臨床実習開始前は、マイナスイメージである「近づきにくい」は、臨床実習後に半減し、プラスイメージである「純粋」、「素直・明るい」は有意に増加していた。臨床実習を通じて障害者に関わることで、障害者への苦手意識が克服できた者が多くみられた。臨床実習開始前に障害者に関わった経験者は7

割と多かったが、関わり方は限定的なものが多く、実際に関わった頻度は少なかったと思われる。

歯科衛生士が障害者に関わる役割は大きく、多岐にわたっている。社会における高齢者の割合が増加するにつれて障害者数も増加する。近い将来、障害者の受け入れは、介護施設はもちろん、一般歯科診療所でも増加することが予想される。歯科衛生士は地域保健の重要な担い手となる。単に障害者と交流活動を行うだけでなく、自主的な行動を起こすことで、障害者との医療関与が増加した報告⁶⁾がある。障害者歯科での臨床実習を通じて、歯科衛生士の役割を理解し、イメージ変化に繋がったと考える。

3) 共生社会の実現に向けて

国は、ノーマライゼーションの考え方に基づいて、障害のある人もない人も共に生活するための環境作りを進めている⁷⁾。障害のある人が身近で普通に生活しているのが当たり前という共生社会の考えは、徐々に広まりつつある。内閣府の平成24年の「障害者に関する世論調査」⁸⁾では、65.1%が「知っている」と回答しており、共生社会の考え方には88.4%が支持している。本調査では、すべての学生が知っていると回答しており、世論調査の結果を上回った。平成22年度の歯科衛生士学生での調査⁹⁾でも「知っている」が83.5%、「支持する」が92.9%であった。

臨床実習終了後の理解している障害名数は約1.3倍に増加し、各障害についての理解も増加した。これは、臨床実習で、障害者と診療室で関わることにより、来院した患者の障害に対して興味を抱き自己学習したことで、学生自身が興味を持って学習し理解を深めることができたと考えられた。今回の調査で認知度が低い障害名に対しては、臨床実習前に行われる講義でも理解を深めていくよう指導したい。

結 論

臨床実習を行うことで障害者への理解が深まるとともに、歯科衛生士の役割を認識させるのに役立っていた。将来の歯科衛生士の人材育成のために、障害者と円滑なコミュニケーションを図ることと、障害の認知度を上げるために、さらなる工夫を行うことが必要である。

文 献

- 1) 日下和代, 石郷岡友美, 鈴鹿祐子, 石田洋子, 麻賀多美代, 麻生智子. 臨地・臨床実習の有効性についての検討—学生の自己評価から—, 千葉衛短大紀, 2007; 26:21-31.
- 2) 森崎市治郎; 日本障害者歯科学会編. スペシャルニー

- ズデンティストリー障害者歯科. 第1版, 東京: 医歯薬出版:2009: 8-10.
- 3) 大西智之, 田井ひとみ, 久木富美子, 角谷久美代, 金高洋子, 藤原富江, 樂木正実. 臨床実習が歯科衛生士学生の障害者歯科への印象や興味に与える影響. 障歯誌. 2010;31:737-743.
- 4) 堀雅彦, 岡崎好秀, 松村誠士, 下野勉. 歯学部学生に対する小児歯科学的観点からの障害児歯科学教育について—講義前後のアンケート調査の比較—. 障歯誌. 2006;27:120-127.
- 5) 安田順一: 日本障害者歯科学会編. スペシャルニーズデンティストリー障害者歯科. 第1版, 東京: 医歯薬出版:2009:85-89.
- 6) 雲野泰史, 小口春久. 歯科技工学科学生と歯科衛生科学生の障害の見方に関する意識調査. 日歯教誌. 2011; 27: 5-12.
- 7) 内閣府; 障害者白書平成25年版. 1版, 東京: 印刷通販:2013:41-47.
- 8) 内閣府; 障害者白書平成25年版. 1版, 東京: 印刷通販:2013:28-40.
- 9) 小澤晶子. 歯科衛生科学生の障害児者に関する意識調査—3年間の教育後の変化—. 鶴見大紀 保育・保健. 2011;48: 1-9.
-